社会統計学は中国経済研究に貢献したか

－ 日中統計部会における研究の成果と課題－

矢野剛（徳島大学）

本報告は報告者の研究上の立場－ 統計を利用して中国経済の実証分析をおこない実態解明をすることに興味を持つ立場－ からのレビューをその内容とする。その観点から経済統計学会会員による中国統計研究および数量的手法による中国経済研究の成果が他にはない特色と強みを持ちうる可能性を論じ、次の 10 年において経済統計学会が日本の中国経済数量分析をリードする一角となる未来を展望する[1]。

１．統計作成および統計制度論

統計作成および統計制度論、いわば統計そのものに関する議論は、経済統計学会が伝統的に強みを持ってきた分野である。また近年の中国 GDP 統計（信憑性）論争にみられるように、中国統計研究においてもこれは大変重要な分野である。そのため、ここでは強みの発揮という観点から、近 10 年経済統計学会会員がこの分野においてどのような学術的貢献を成し遂げてきたのかをみていきたい。以下の論点についての紹介と議論を提示する。

(1) 中国統計方法論
(2) 中国 GDP 統計論争
(3) 統計作成および制度論

総括すれば、中国統計作成および統計制度論分野においては、経済統計学会員の業績は日本における当該分野の研究をリードしているといって良いだろう。しかし、これは経済統計学会が社会統計学を専門とする学会である以上当然のこととも言える。すなわち比較的狭いある特定分野では、経済統計学会が優位性を示してきたとする慎重な評価が妥当であろう。問題はそれがより広い中国経済研究全体をリードできる成果に結びついている否かである。そこで次にその中国経済研究の有力な一部をなす中国経済数量分析分野における会員の貢献を振り返ってみよう。

---

[1] このような観点からのレビューがおこなわれる背景には、経済統計学会がカバーする諸研究分野のなかで、日中統計分野は経済統計学会内部だけでは研究が完結しない性質をもつ分野に属することがある。

２．統計を用いた数量分析

近年日本でも増加しつつある数量的手法による中国経済研究の中で、経済統計学会会員による中国経済の数量分析が、どのような学術的貢献や独自性の発揮を成し遂げてきたを振り返る。いわば、世界水準へのキャッチアップという観点から、会員の業績の位置づけを探る。

(A)　産業連関表分析

日本の中国経済研究では、産業連関表分析が相対的に盛んである。また、他の国・地域の分析ではマクロモデル･CGEモデル(「計算可能な一般均衡モデル（Computable General Equilibrium model）」）分析を用いるようなケースでも産業連関表分析で代用することも多いように思う。
経済統計学会においても、産業連関分析を用いた中国経済（日中比較・関係含む）研究は盛んである。ここでは、その理由と意義付けを探る。

(B)　マクロ計量モデル・CGE モデル分析　((A)(B)はシミュレーション分析を主体とする点で共通)

産業連関表分析とマクロ計量モデル・CGE モデル分析はシミュレーション分析を主体とする点では共通している。ただし上記(A)でも触れるように、経済理論的な観点からは産業連関表分析より制約的な仮定の少ないマクロ計量モデル、さらには CGE モデルによる分析のほうが望ましいことは確かである。ここでは、経済統計学会員が関与したそれらの試みを紹介する。

(C)　ミクロ計量分析

英文ジャーナルの世界での中国経済研究では（のみならず、開発経済学あるいは経済学実証研究全体において)、ミクロデータを用いて経済主体の行動レベルから計量分析をおこなうアプローチが有力になってきており、ほぼ研究の主流を占めると言って良い。日本でも、このアプローチが散見されるようになってきているが、そのなかで会員がどのような学術的貢献を果たしているかを検証する。

３．今後の課題

経済統計学会から日本の中国経済数量分析をリードする成果を生み出す一つの道筋は、本報告でも取り上げた統計制度論における蓄積あるいは強みが、統計を使用した実証研究上如何なる利点に転化するのかを明確にすることであろう。一言で表現すれば、統計自体に強い数量分析へ、である。この作業を一人の研究者がやり遂げるのは理想であるが現実には難しい、あるいは率直に言えば殆ど不可能であろう。それにはおそらく統計制度論を得意とする研究者と経済理論・計量経済学に強みを持ち実際の実証分析に従事する研究者とのコラボレーションが欠かせない。これこそが今後の課題である。